



平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園

2019年 7月号

「虫けらものにもある居場所」

牧師・園長 長村亮介

キリスト教はあまり「頑張れ」とは言いません。そういう意味では、よくある啓発書のようなではありません。しかし、聖書を読んで元氣になれないかと言うと、そういうことでもありません。神さまが私たちと喜びや悲しみを共にしてくださるからです。それは信仰によって、神さまを自らの傍らに感じて、心が支えられ、傷が癒されて行くのが分かるからです。それが神さまを信じているということなのではないかと思えます。

この間、ふつとフランツ・カフカのことを思い出され、あの『変身』を求めました。前に読んだのは、ずいぶん昔で、十代の終わりでしょうか。その時の本はとっくにどこかになくなっていました。

『変身』は、ある朝目が覚めると、自分が大きな「虫」になってしまった青年グレーゴルの心の声が淡々と綴られていく不思議な本です。私だったら、その場で絶叫して失神すると思います。ところが、その虫になったグレーゴルは、自分の背が堅い鎧のようになっていて、たくさん足の細い足がびくびくと動いているのを大して驚きもせず、行きたくない仕事に間に合わないことばかりを気にしているのです。どうも自分の体が醜い虫になったことを受け入れていないのではないかと思われます。虫である自分を他人ごとのように、家族に虫として扱われる様子や虫である自分を家族がどのように思っているのだろうかということ報告しながら、少しでも家族に不快な思いをさせないように気を遣っている始末です。実はグレーゴルの家族、父と母と妹は、彼の勤める収入で生活をしていたのに、彼は虫になる以前から、自分の居場所がなかったのかも知れません。作者のカフカ自身も

仕事のできる有能な人であったようですけれども、この『変身』には、彼の生きづらさ、居場所のなさ、その他人ごとのような語り口に投影されているのではないかと思えます。カフカはユダヤ人ですが、神さまのことはその存在を認めることは決してなかったでしょう。なぜなら神さまを信じるというのは、自ずと自分を愛することになるからです。

旧約の詩編には次のようなものがあります。

「わたしは虫けら、とても人とはいえない。人間の屑、民の恥。

わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い唇を突き出し、頭を振る。

『主に頼んで救ってもらおうがよい。主が愛しておられるなら

助けてくださるだろう。』

わたしを母の胎から取り出し

その乳房にゆだねてくださったのはあなたです。

母がわたしをみごもったときから

わたしはあなたにすがってきました。

母の胎にあるときから、あなたはわたしの神。

わたしを遠く離れないでください

苦難が近づき、助けてくれる者はいないので。」

(詩二十二編七〜十二節)

この人は何をしてしまったのでしょうか。「わたしは虫けら」と言うのですから、自分でも自分が許せないのです。しかしこの人は自分では許せなくても、神さまの愛の中に、自分の居場所を求めています。救いとは、神さまの愛の中に自分の居場所、神さまの御国を見い出すことです。自分の居場所があれば、きつと生きられる。Ω

平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園

2019年 7月号

22:2

22:3

22:4

22:5

22:6

22:7

22:8

22:9

22:10

22:11